

動物食の考古学

～ヒトはいろいろな動物を食べて生きてきました～

丸山 真史（東海大学人文学部）

1. 動物考古学の目的

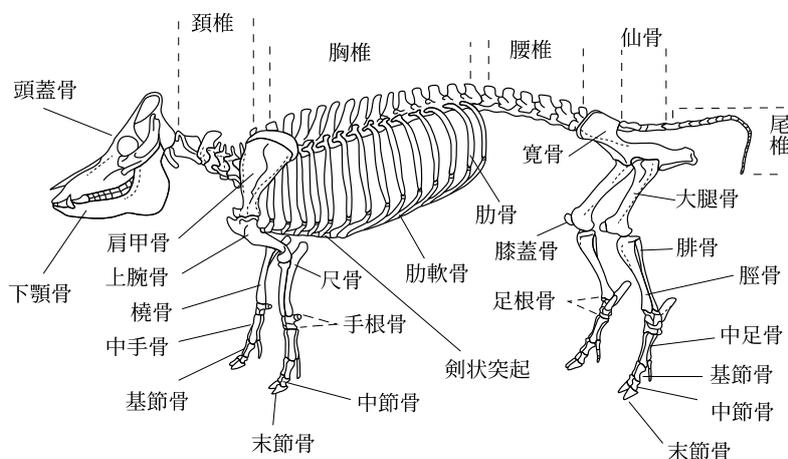
遺跡の発掘調査では、動物の骨や歯が出土することがあります。このような骨や歯などの動物に由来する遺物を「動物遺存体」と呼びます。この動物遺存体を専門的に研究する「動物考古学」という分野があり、近年では考古学や歴史学研究に欠かせないものとなってきました。

動物考古学は、人と動物の関係を明らかにして、過去の文化や社会を読み解いていくことを目的としています。1980年頃から、日本考古学でも動物考古学的な研究が注目されるようになり、狩猟・漁労などの生業、食生活、家畜利用などの問題について取り組まれています。動物遺存体を研究資料とすることで、実際に動物を利用した人間の生活が鮮明に描き出され、具体的な人と動物の関係が明らかにされつつあります。今回は、動物考古学によって明らかにされてきた食に関する研究成果について紹介します。

2. 骨の持ち主を調べる

遺跡から出土する骨は散乱した状態であることが一般的です。それは、人間が食用とするには、肉を取るために解体することや、土に埋まるまでの間に動物の食害にあったり、風雨に晒されたりすることで散乱するためです。散乱していない動物骨は、お墓などに埋葬された場合で、生前の姿のままに骨格部位が並んだ状態でみつかることもあります。

動物考古学では、分析資料となる一つ一つの骨について、動物の種類、骨格部位、部分を特定し、表面に残る加工の痕跡などを観察して、人間が利用した動物について調べていきます。どのような動物を利用していたのかが明らかになれば、人間の食に関わる活動を復元することが可能になっていきます。



ブタの全身骨格図と部位名称

3. 駿府城内遺跡から出土した動物遺存体

2007年に実施された駿府城内遺跡では、多くの動物遺存体が出土しています。大きくわけて、貝類、魚類、鳥類、哺乳類があり、これらは食用になるものが多くあります。これらの動物遺存体は、大溝 SD500 から出土しています。この大溝からは、木製の箸、折敷、漆椀などの食膳具も多く出土しており、動物遺存体には食材となったものが含まれていることが予想されます。この溝は15世紀から16世紀にかけての廃棄物と考えられ、漆器や貿易陶磁などの奢侈品から、今川氏の居館との関連が窺えます。

出土した動物種は下に示した通りであり、このなかで食用と考えると差し支えないのは魚類の全てと、哺乳類のイルカ類、イノシシであり、おそらくアナグマも食用と考えられる。カラス類、イヌ、ネコは食用となったか定かではない。特に、ネコは全身骨格の多くが確認できており、食用ではない可能性が高い。

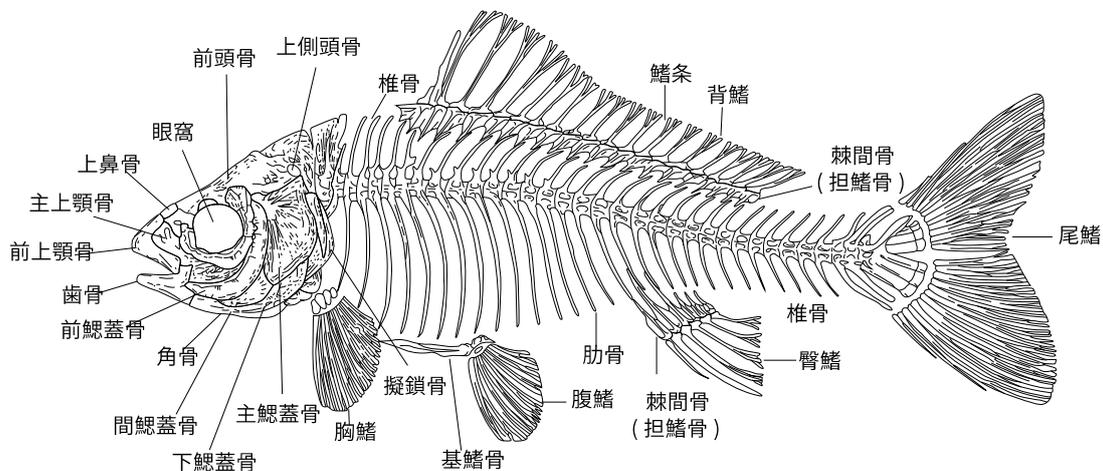
出土した動物の種類（『駿府城内遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009年より）

- ・魚類…ブリ、マダイ、カツオ、マグロ類
- ・鳥類…カラス類
- ・哺乳類…イルカ類、ネコ、アナグマ、イヌ、イノシシ
- ・その他に貝類などもある

4. 海産物の地域性

マダイの兜割

大型のブリ、マダイは本州、四国、九州の各地域の遺跡で頻繁に出土します。これらが広く食用となっていたことを示しており、静岡も例外ではなかったことが窺えます。駿府城内遺跡から出土したマダイの歯骨を観察すると、口先の端部が庖丁によって切断されています。これ



魚類の全身骨格図と部位名称

はマダイの頭部を真二つに切断した「兜割」の痕跡とみられます。この「兜割」は、マダイの前頭骨によくみられる痕跡です。中世の各地でみられる「兜割」は、調理法の普及を示しています。さらに詳細を観察すると、頭を逆さにした状態で庖丁を入れていることが判明しました。これは「内割」と呼び、調理ではなく、商品としての切り方であるとされます。

カツオは特別な魚

一方で、カツオやマグロ類の出土には地域性があります。鎌倉や博多などの中世都市からの出土はみられますが、瀬戸内海沿岸の遺跡ではみられません。これらの魚種は外洋性回遊魚であり、瀬戸内海での漁獲はないためと考えられます。ところが、平安時代に成立した法律書の一つである『延喜式』には、都への貢納物としてカツオが登場します。カツオは特別な魚であり、奈良時代の木簡にも駿河国からもたらされたことを知ることができます（「伊豆駿河国堅魚遺十節」…平城宮の南にある長屋王邸宅跡で出土）。平城京跡や平安京跡において、カツオの骨が出土しないことは、加工品として輸送されたためでしょう。

静岡とイルカ食

イルカもまた中世都市の鎌倉や博多で出土しており、現在もイルカの食習慣は各地で見られますが、広く普及しているようではありません。和歌山県や岩手県は現在もイルカを捕獲しており、漁獲しなくなった地域に供給しています。静岡県もその一つであり、かつては伊豆半島でのイルカ漁が活発であり、静岡県東部から中部にかけてはイルカの食習慣が現在も続いています。駿府城内遺跡で出土したイルカの骨には、解体痕がみられ、食用となっていたことが窺えます。

時代を遡れば縄文時代の竹の台遺跡や井戸川遺跡でもイルカの骨が出土しています。これらの遺跡は伊東市に位置しており、相模湾で捕獲されたものでしょう。井戸川遺跡では、クジラの椎骨を中心にイルカの頭蓋骨が並べられた状態でみつきり、儀礼が執り行われたことが推測されています。このような儀礼は、能登半島の石川県真脇遺跡でもみつかっており、ここでは大量のイルカの骨が出土したことで、活発なイルカ猟が行われたと考えられています。富山県の小竹貝塚では、石鏃か石槍の先端が突き刺さった状態でイルカの肋骨が出土しています。追い込んだ後に刺突したのでしょうか。縄文時代からイルカ猟が盛んな能登半島や伊豆半島はイルカの回遊ルートにあり、小さな湾が形成された地域であることに共通点があり、イルカの捕獲に適した場所であったと考えられます。

5. 日本に食用家畜はいたのか

かつての日本社会は、肉食を忌避しており、動物性タンパク質は専ら魚貝類であったと考えられてきました。そのため考古学でも、弥生時代以降は農耕社会となるが、食用家畜の生産が欠落していたと考えられていました。実際に大陸と比べると食用家畜の普及は遅いことが確認

できます。

弥生時代以降にブタやニワトリといった食用家畜が出現することは動物遺存体でも確認されています。駿府城内遺跡ではイノシシの骨が出土しており、これらには飼育された個体が含まれている可能性があります。その根拠に幼獣（瓜坊）の骨がみつかっており、これにも解体痕がみられ、食用にしたと考えられます。イノシシの飼育や家畜化されたブタは、弥生時代から存在したという指摘がありますが、普及という点では中世以降、特に中世末から近世初頭の中国やヨーロッパとの交流が活発化する時期と考えられます。それを象徴する遺跡として、大分県の豊後府内跡があげられます。豊後府内は、キリシタン大名として有名な大友宗麟の拠点であり、城下には唐人町が形成され、多様な肉食を窺い知ることができる動物遺存体が出土しています。そのなかに、国外から持ち込まれたと考えられるブタの出土は、日本の食文化に影響を与えたことと思われます。

この豊後府内ではイヌも食用に解体されたものがありました。駿府城内遺跡でもイヌは出土していますが、解体痕が確認できませんでした。散乱状態で出土していることから解体され、食用になった可能性もありますが、判断が難しいところです。

参考文献

伊東市教育委員会編 2018 『井戸川遺跡』

岡嶋隆司 2004 「真鯛頭部の解体法について」『動物考古学』第 21 号 動物考古学研究会

栗野克巳・永浜真理子 1985 「相模湾のイルカ猟」『季刊考古学』第 11 号 雄山閣

静岡県教育委員会編 1991 『竹の台遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所編 2009 『駿府城内遺跡』

樋泉岳二 2014 「鎌倉・江戸の水産資源」『季刊考古学』128 号 雄山閣

丸山真史 2018 「中近世のイノシシ・ブタ利用」『季刊考古学』第 144 号 雄山閣

丸山真史 2022 「人と動物の関係史」『季刊考古学』第 158 号 雄山閣

丸山真史 2022 「中世の犬食い」『季刊考古学』第 159 号 雄山閣